

東京電力福島第一原発事故から七年が経過して間もない十四日、関西電力大飯原発3号機（おおい町）が再稼働した。事故直後に福島原発の二十キロ圏内にある福島県富岡町から滋賀県高島市に移住した青山和憲さん（70）、総子さん（61）夫妻は、現在の自宅から約四十キロの所にある大飯原発が動き出したことに「事故への怒りを思い出す」と語った。

（山谷 征裕）

和憲さんは現在の名古屋守山区生まれ。東京で絵を学んでいた時に出会った総子さんの故郷、富岡町で画家生活を送っていた。二〇一一年三月十一日、二人は海岸から一キロの高台にある自宅にいた。余震を警戒しながら一晩過ごした翌十二日の朝、近所の人の

「逃げろ」という声で福島原発の危機的な状況を知った。西隣の川内村へ逃げる時は、まだ「二、三日で帰れるイメージだった」。だが十四日に福島第一原発3号機の水素爆発などが断片的に伝えられ、「このままでは命が危ない」と県外への

避難を決意。十七日に総子さんの妹を頼って大津市に移った後、三月末、高島市が避難者用に借り上げた住宅に入った。テレビで震災の映像が流れるたび、東電への怒りや富岡町を離れざるを得なかった悲しみが胸が苦しくなった。気晴らしに車を走ら

福島から滋賀へ移住の夫婦 「避難計画も不十分」



思い出す事故への怒り

せ、すぐそばの県境を越えて福井県に入ると看板が目についた。

「大飯原発」「高浜原発」「美浜原発」「敦賀原発」…。これまで福島以外の原発は意識になく、「近くにこんな巨大なさんあつたのか」と驚いた。

震災前に動いていた全国の原発が定期検査のため運転を停止。福島事故のショックで脱原発の世論が広がり、「再び動くことはないだろう」と思い、一二年六月、高島市に一軒家を購入した。翌月、「電力不足」を理由に政治判断で大飯3、4号機が再稼働した際も「一時的だろう」と信じました。しかし、期待は裏切られた。

高島市でも創作活動は続けており、一枚だけ被災地の絵も描いた。十四日は再稼働を報じるニュースを自宅のテレビで見た。和憲さんは「避難計画も十分じゃないのに」とつぶやく。原発再稼働の流れができつつある中、原発の新たな「安全神話」がつくられているように思えてならない。「こうしてフクシマが忘れられていくんだ」

震災のがれきを描いた作品の前に、大飯原発再稼働への憤りを語る青山和憲さん（滋賀県高島市で）（横田信哉撮影）